

# 赤とんぼ 童謡 歌詞の意味

夕焼小焼の赤とんぼ 負われて見たのはいつの日か

「夕焼け小焼の赤とんぼ」の歌い出しで知られる『赤とんぼ』は、作詞：三木露風、作曲：山田耕筰による日本の童謡・唱歌。



美しい歌詞は、1921年出版の「眞珠島」に掲載されたもの。三木は小・中学生時代から詞や俳句・短歌を新聞や雑誌に寄稿しており、17歳で処女詩集を、20歳で代表作の「廃園」を出版するなど、詩人としての才能を早くから開花させていた。

歌詞の意味については後述する。

【試聴】赤とんぼ 由紀さおり 安田祥子 歌詞付き 童謡

歌詞：『赤とんぼ』

夕焼小焼の 赤とんぼ  
負われて見たのは いつの日か  
山の畑の 桑の実を  
小籠(こかご)に摘んだは まぼろしか  
十五で姐や(ねえや)は 嫁に行き  
お里のたよりも 絶えはてた  
夕焼小焼の 赤とんぼ  
とまっているよ 竿の先

## 歌詞の意味

『赤とんぼ』の歌詞は、作詞者・三木露風の故郷である兵庫県揖保郡龍野町(現:たつの市)で過ごした幼少期の情景に基づいている。

三木露風が5歳の時に両親が離婚。母親とは生き別れとなり、祖父の元で子守り奉公の女中(姐や)に面倒を見てもらっていた。

女中の姐や(お姉さん)に背負われて「夕焼小焼の 赤とんぼ」を見た幼い頃。その姐やもやがてお嫁に行き、姐やからの手紙(便り)も送られてこなくなってしまった。

歌詞の大意はこんなところだが、「お里のたより」については、誰から誰への手紙なのかについては解釈の余地がある。

姐やの故郷から姐やへの手紙なのか、お嫁にいった姐やから三木露風への手紙なのか、母親から三木露風への手紙なのか、様々に考えられる。

聴く人それぞれの解釈の余地を残しておいた方が作品に奥行き・厚みが出るので、これはこのまま結論を出さずにおいておくのが良いだろう

「赤とんぼ」の作詞は三木露風ですが（大正10年に発表・作曲は山田耕作）、詞の内容は露風自身の幼少時代の思い出を正直に書いたものと思われま

す。露風は5歳の時両親が離婚することになり、以降母親とは生き別れで祖父に養育されることになったのですが、実際は子守り奉公の姐やに面倒を見てもらい、そのときの印象を歌にしたものです。

だから詞の第一節の「おわれてみたのは」を漢字で書けば「追われてみたのは」ではなく、「負われて見たのは」であり、姐やの背中におんぶされて肩越しに見た夕焼け という意味です。

姐やといっても15歳で嫁に行ったのですから、当時の農家は赤貧のため口べらしもあっての子守り奉公で、しばらくして嫁いでいったわけですが、嫁入り先の農業労働力としての意味もあり、その後の姐やも働きづめの一生を送ったのでしょ

うね。また、「お里の便りも絶えはてた」の意味は、姐やが嫁に行ってから彼女の便りがなくなった と解釈する人もいますが、私の推薦する解釈では、お母さんは離婚し実家に出戻っているのですが、実のお母さんが実家の近くの娘を子守り奉公に出すように囚

るにより、彼は姐やからお母さんの便りを聞くことが出来たのですが、姐やも嫁に行くことになって、もうお母さんの消息も聞くことが出来なくなったという意味だと思

います。この詞の中に3つの叙情がひとつの思いに重なりあっています。

ひとつは、真っ赤な夕焼けと赤とんぼの、美しくそして鮮烈な情景、忘れえぬ情景。

ふたつは、姐やの背中に感じる体温の暖かさと、姐やへのほのかな恋慕の情。

そしてみつつは、もう会うことが出来ない、母への強く切ない未練の心。

この短い詞の中に万感の思いが込められていたわけで、だからこそ時代を超えて私たち日本人の心を揺さぶる理由がそこにあったのですね～。